名士の足音

桐生倶楽部会館100年❶

桐生市仲町の桐生倶楽部会館は、12月で完成100年を迎えた。名士が集い桐生の発展のため、産業、政治、文化などあらゆる分野で意見を戦わせた場所。改修を繰り返し、桐生の盛衰を1世紀にわたり見つめてきた会館の姿を紹介する。

織都の繁栄けん引

誕生

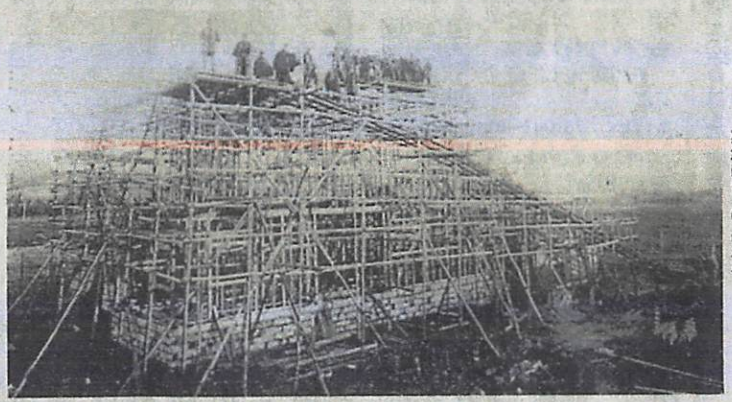
織都・桐生の産業界をけん引した約40人によって1900年、後に会館の〝あるじ〟となる倶楽部の前身、桐生懇和会が発足した。

中心人物は森宗作（1863～1932年）。「第四拾銀行」の頭取を務めた森の「郷土の発展はやがて自己の発展である」という信条が、懇和会設立に大きく影響した。懇和会は電話敷設や水力電気会社設立など、インフラ整備に尽力。高等教育機関の設置にも力を注ぎ、15年に桐生高等染織学校（現・群馬大理工学部）設置を実現させた。

懇和会は発展的に解消し、18年に桐生倶楽部として生まれ変わる。会合や、来客をもてなす場も必要となり、会館建設が決まった。同年、倶楽部は約5300平方㍍の敷地を購入する。価格は920円50銭だった。

会館の設計を任されたのは清水巌。米国の住宅設計コンクールで1位になった経歴を持つ、まだ20代の若者だった。同市出身で講談社の創設者、野間清治からの紹介だったという。建設費用は総額5万円余り。森の5千円をはじめ倶楽部メンバー寄付金の2万円と借入金で、会館は1919年12月に完成した。

クリーム色の壁に赤れんがが映える桐生倶楽部会館



建設中の会館

（第三種郵便物承認）

名士の足音

桐生倶楽部会館100年 ❷

建築

スペイン風の先駆け

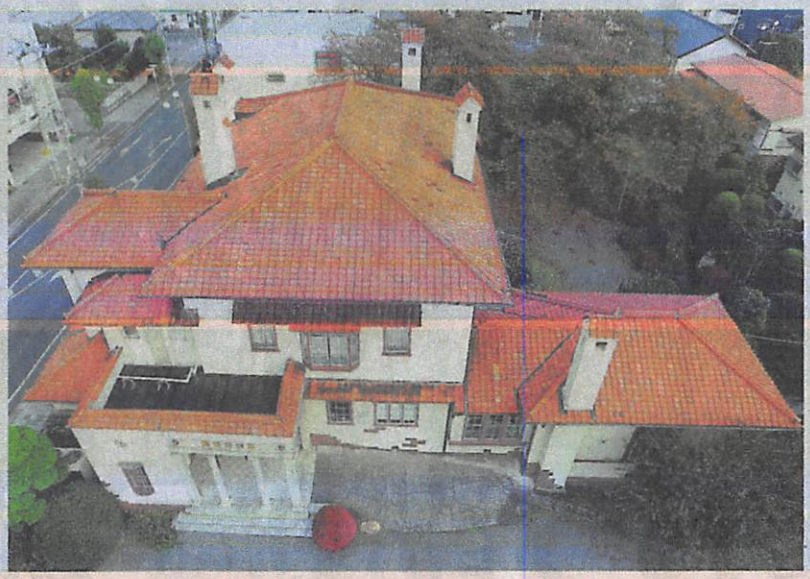
日本のスパニッシュ建築の先駆けとされる桐生倶楽部会館。5本の煙突が確認できる

クリーム色の外壁、緩い傾斜の屋根に赤い瓦。100年前に完成した桐生倶楽部会館（桐生市仲町）は、スパニッシュ様式の洋館だ。

5年前に桐生で講演した建築史家の丸山雅子さんは、同会館を「日本の『スパニッシュ建築』の先駆け」と位置付ける。特に外壁と同じ仕上げで高く立つ煙突が特徴の一つだという。

設計者の清水巌は、設計だけでなく会館建設にも専念した。「桐生倶楽部五十年史」には、「建築のスタイルは南欧風にまとめ、色彩の調和に苦心した。工事中にビリヤード台を2台寄付され、急きょビリヤード室を作ったことを覚えている」と寄せている。

丸山さんによると、米国でスペイン植民地時代の建物を再現した建築様式が流行した時期があった。その影響を受け、日本でも同様の建物が大正から昭和初期に見られるようになったという。「スペイン風」「南欧風」「ミッション様式」「スパニッシュ・コロニアル様式」といった呼称があった。丸山さんは「当時の日本の若い建築家が、米国の最新建築をいかに熱心に学んでいたかを示す証拠」と会館の価値を説く。



桐生倶楽部百年史編さん委員の一人、村田豊樹さん(71)は「100年前に建てられた会館が現役で使われ続けていることが宝」と強調する。

（第三種郵便物承認）

名士の足音

桐生倶楽部会館100年 ❸

部屋ごとに歴史の記憶

赤じゅうたん

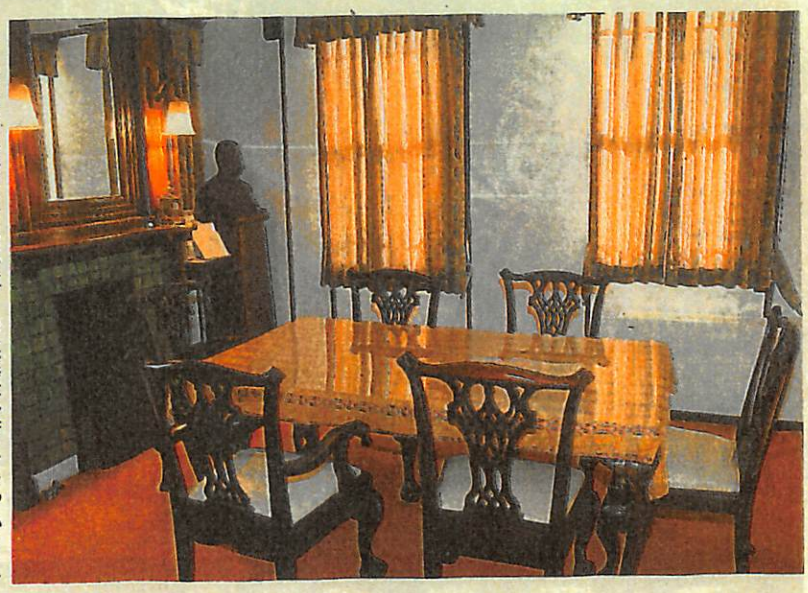
桐生倶楽部会館は、桐生市の中心市街地にひっそりたたずむ。木造2階建ての寄せ棟造りで、屋根は瓦ぶき。延べ床面積は約560平方㍍。重厚な石造りの玄関ポーチをくぐると、ウールの赤じゅうたんが来館者を迎える。

1階ホールのペンダント照明に刻まれた「平和」「幸福」「親睦」の文字は、倶楽部設立時に掲げられた三つの理念だ。〝社員〟と呼ばれる倶楽部会員の名前が書かれた名札は個人、法人合わせて238枚並んでいる（12月5日現在）。2008年から女性が入社（入会）し、30人の社員がいる。

1階には1号室から6号室まで6部屋あったが、3号室は1957年にホールとなった。1号室はビリヤード室だった。37年にビリヤード台などが売り渡された記録が残っている。この部屋の基礎は特にしっかりしているという。4号室は理事長室。窓際には、会館の設計者である清水巌を紹介した野間清治の胸像が置かれている。

階段を上ると、講演会などに使われる定員100人の大広間がある。室内には歴代理事長10人の肖像画や写真がずらりと並ぶ。

各部屋に足を踏み入れると、桐生の発展のために意見をぶつけ合った政財界のリーダーたちの声が聞こえてくるようだ。



「専用室」の名札が掛けられている理事長室。窓際に桐生市出身の講談社創設者、野間清治の胸像が置かれている

（第三種郵便物承認）

名士の足音

桐生倶楽部会館100年 ❹

碁石

「全員の白」が入会条件

桐生倶楽部会館（桐生市仲町）には、興味深いものがある。「決」と糸で縫われた袋と碁石。新しい社員（会員）の入社（入会）を決める時に用いられる。

倶楽部に入社するためには、社員2人以上の推薦が必要となる。推薦があれば、月1回開かれる理事会に諮る。推薦者が入社希望者の人柄や職業などを紹介し、理事が白か黒の碁石を袋に入れる。白は入社に賛成で、黒は反対。「全員の白（現在の理事は20人）」が入社の条件だ。

黒の石が入っていた場合、黒を入れた理事は1カ月の間に理由を理事長に説明することになっている。申し出がなかった場合は誤って黒を入れたのだと判断され、入社が認められる。過去にはこうしたケースがあったという。

なぜ、碁石が使われているのか。

桐生倶楽部百年史編さん委員の村田豊樹さん(71)は「ブラックボール（反対者が入れる黒球）に起因しているのではないか」と、17世紀後半にクラブの組織形態が普及した英国の影響を推察する。さらに「英国のクラブの習わしを〝輸入〟し、球に代わる物として桐生は碁石を使ったのではないか」とみる。

倶楽部独自の〝儀式〟は途切れることなく、これからも受け継がれていくだろう。

桐生倶楽部への入社を決める時に用いられている碁石と袋

（第三種郵便物承認）

名士の足音

桐生倶楽部会館100年 ⑤

未来へ

価値広めて次の100年

桐生の文化的シンボルである桐生倶楽部会館（桐生市仲町）は、1996年に国登録有形文化財となり、2015年に市重要文化財に指定された。しかし、東日本大震災では天井が落ち、煙突にひびが入る被害もあった。

会館の国重要文化財指定を見据え、倶楽部は17年、長期修繕計画委員会を立ち上げた。的確な保存活用に向け、市や県、国の助言を受けながら建物の調査、部分的な改修を行っている。

一方で、大規模な改修が必要となれば費用もかかる。「われわれだけでの対応には限界がある」と第12代理事長の森寿作さん(79)は胸の内を明かす。

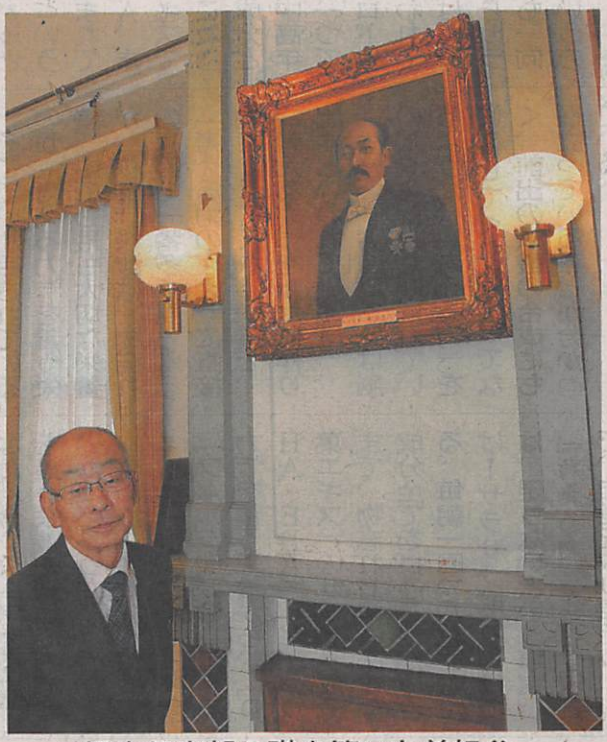
「文化庁には貴重な建物と認識してもらっているが、歴史的価値を裏付ける資料などをまとめることが重要になる」。森理事長は、多くの市民に建物に関心を持ってもらうことも不可欠とする。

価値を伝える活動の一つに、地元の小学校と連携した子ども向けの会館案内がある。森理事長は「他の小学校にも打診している。さらに高校生など若い世代に興味を持ってもらう事業を考えている」と力を込める。

会館は、今も結婚披露宴会場として親しまれている。次の100年を見つめ、どんな形でバトンを託すのか。先人たちは見守っている。

（おわり）

桐生支局・高橋克典が担当しました。



桐生倶楽部の礎を築いた曽祖父、森宗作の肖像画の前で「次の100年に向けてしっかりとバトンを渡したい」と話す森理事長